

治承・文治年間の『明月記』における定家の文学意識

——『狭衣物語』の影響を中心に——

藤川功和

はじめに

『明月記』は藤原定家の記した和化漢文体の日記である。近年は明月記研究会が中心となって雑誌『明月記研究』が刊行されるなど、『明月記』そのものに対する関心が高くなっている。私自身、公家日記の文章上に記主の文学的操作がいかにも現れているのか（さらに言えば公家日記の文学性を考えることにもなる）を研究しているものであるが、そういった立場からも『明月記』は大変興味深い日記である。

例えば治承四年八一八〇〇二月十四日条の著名な「明月無片雲、庭梅盛開」の一節に関して、早くは石田吉貞氏が「純然たる文学的日記」と評しておられるし、また昭和五十九年に刊行された「研究資料日本古典文学⑨日記・紀行文学」の『明月記』の項では、久保田淳氏が「それ自体文学作品として読むに堪える部分も少なくない」と述べておられる。

こういった先学の指摘をふまえつつ、私自身、今後『明月記』本文上に記主の文学的操作がいかにも立ち現れているのかを明らかにしようと思っている。

ただ一口に『明月記』研究といっても、『明月記』は、定家自筆原本五十四巻を初め、写本も多数存し、現存の収録記事は治承四年（十九歳）から嘉禎元年八一三三五（七十四歳）にまで及んでおり、全ての記事について検討する用意が今の私には出来ていない。そこで本稿では特に治承・文治年間、つまり定家青年期の記事について検討を加える。

一 日記における定家の構成意識

治承元年から文治六年八一八〇〇までは十三年程あるが、この期間の『明月記』本文は欠脱が著しく、治承年間では四年と五年にそれぞれ数カ月分の記事が存し、文治年間に至っては文治四年に二日分の記事しか現存していない。よってこの期間の『明月記』の文章上の特徴といっても、厳密には規定し難いのだが、この期間には例えば先述した記事を目にすることが出来る。

〔資料1〕 治承四年二月十四日条

十四日、天晴、明月無片雲、庭梅盛開、芬芳四散、家中無人、一身徘徊、夜深婦寢所、燈髻髻、猶無付寢之心、更出南方見梅花之間、忽聞炎上之由、乾方云々、太近、須臾之^間、風忽起、火付北少将家、即乘車出、依無其所、渡北小路成実朝臣宅給、

倉町等片時化煙、風太利云々、文書等多燒了、刑部卿着直衣被來臨、入道殿令謁給、狭小板屋、每事難堪、

(本文は「史料纂集」、以下同じ)

定家十九歳の時の有名な記事である。雲一つない月の下、庭に咲き誇る梅の香のただよう中、一人歩く定家。一度は寝所に戻ったものの、寝つけずに再び外に出、梅の花を定家は眺める。とその時、近くで火災との報を聞き、それまでの静寂は破られ、定家は父俊成と共に慌ただしく避難する、といった記事内容である。

特にこの日の記事の前半部に関しては、先述した石田氏の指摘や、三木紀人氏の「この風景の中に描かれた定家は、普通の漢文日記に出る作者自身よりも、物語から抜け出た貴公子のような趣を持っている」といった指摘がある。確かに両氏が指摘されるような雰囲気を持った記事ではあるが、私がここで特に注目したいのは定家の日記における確かな構成意識である。

日記の前半で定家は「家中無人」「一身徘徊」と殊更に一人であること、さらには言えば火事が起こるまでは全くの静寂であったことを強調している。そして記事の後半で「忽聞炎上之由」とそれまでの静寂がとたんに破られ、火事の報を耳にし、父俊成と共に難を逃れたという風に記している。

つまり記事の前半と後半とが静と動という形で対置された構成となっているのである。もちろん日次記としてその日の出来事を単に並べただけだという見方もできるであろう。

ただ定家がこの日の出来事を日記に記したのは火事のどきどきも手伝って、後日の事だと考えられる。そうすると例えば「一人で庭を歩き梅の花を見た」という出来事と、「父の家が火事に逢い自分も避難し文書等が多く焼けてしまった」という出来事を比べた場合、定家にとっては父の家が焼け家の財産の一つである文書等が焼けてしまった事の方が余程大事であったはずである。にもかかわらず、定家は後日日記にいきなり火事に遭った記事からは記さず、まず月明かりに照らされ静寂の中一人で梅の花を見ていた件をこの日の記事の冒頭に持ってきている。このように静と動を対置することで単にどちらか一方だけを印象に残った出来事として記すよりも、前半の梅の記事も後半の突然の火事の記事も互いにより強調された形になっている。こういった所に私は、定家が若年から単に事実を事実として記すだけでなく、事実をいかに印象的に日記に書き留めようとしたのか、その意識の現れを見てとりたい。

二 故事の援用による文飾意識

〔資料2〕治承四年十月二十七日条

廿七日、天晴、參閑院殿、七瀬御殿、藏人兼業、清業、奉行、下官兄

弟、盛実、長實、等三人參勤、遷都之後不幾、蔓草滿庭、立部多

顛倒、古木黄葉、有蕭索之色、傷心如箕子之過殷墟、昏黑向土

御門末法成寺辺、弥以冷然、秉燭之後、返上御撫物、退婦、

定家が兄成家と「閑院殿」での「七瀬御祓」に勤仕した折の記事であ

る。この年の六月には平清盛の独断により都が遷都していた。「遷都之後」以下では、旧都の荒廃ぶりが言葉を変えて繰り返して記されている。特に「傷心如箕子之過殷墟」の箇所は、従来から指摘されているように、殷の紂王を諷めたが聞き入れられず朝鮮に渡って王となった箕子が、後に周に赴いた時に殷の旧都を過ぎ悲嘆のうちに麦秀の歌を作ったという故事と、現在の都の荒廃ぶりに対する定家自身の悲嘆とを重ね合わせている。

先の治承四年二月の記事と比べると、静寂と騒然といった対比的構成といったものは見られないものの、中国の故事と現在の状況とを重ね合わせ、自身の悲嘆を強調するといった記し方は、一種のレトリックであって、こういった比喻をわざわざ日記の中に用いていること自体問題になると思われる。

この他にも今まで繰り返し論じられている、治承四年九月の「世上乱逆、追討、雖滿耳、不注之」の一文がある。この一節に関しては、辻彦三郎氏による後の補筆説や、それに対する五味文彦氏による反論がある。この問題に関しては、私自身未だ考えが十分ではないのでここで立ち入って述べることはしないが、どちらの説によるにしても、日記に「紅旗征戎、非吾事」と、生きる上での自己の姿勢を日記に書き留める意識というものは注意しておく必要がある。

以上、用例数は僅かながら、治承年間における特徴的な記事を見つけた。これらの記事の中で定家は、時に綿密な構成意識を以て日記を記し、時に故事を援用しつつ、自身の悲嘆の強調を図りながら

日記を記すといった、様々な試みを行っていることが分かる。

三 日記に見られる物語的場面描写

このように日記に自己の体験を書き留めるにあたっての、定家の様々な工夫の現れが見てとれる記事の中で、今回取り分け私が注目したいのは、文治四年八月十八日九月二日条である。この年定家は二十八歳。この年の十一月には左近衛権少将に任じられるのであるが、この時点では正五位下で侍従であった。まずは全文を挙げておく。

〔資料3〕文治四年九月二十九日条

九月廿九日、壬戌、天陰、入夜雨降、良辰徒暮、依難默止黄昏、參殿富門院、与大輔清談、漸及亥時、無人寂寞、欲退出之間、忽門前有松明之光、有參入之人、内外相驚、權中將參入、被語云、已欲付寝之間、庭前之木葉忽落、聞風音、遂不能寝、忽出騎馬所參也、存人不可候由之間、見件事感涙相催之由、女房感悦、更之掌燈、連歌、和歌等、新中納言、尾張等相加、種、狂言等、及鷄鳴數聲、雨漸滂沱、遠路天明者不便之由被急出、猶徘徊、空階雨滴之句數返、借笠退出、帰蓬間、天漸曙、

九月晦、「難默止」と秋の逝くこの日を一人で過すのに堪え切れなくなつた定家は、後白河法皇の皇女亮子内親王の御所に参つた。

そこで定家は殿富門院大輔と「清談」に及ぶ。そして「亥時」になり、人氣もすっかりなくなり、定家が退出しようとした所、突然「松明

「光」が見え、定家の従兄弟にあたる権中将藤原公衡が参入してきた。公衡は突然の参入を、「已欲付寝之間、庭前之木葉忽落、聞風音、遂不能寝、忽出騎馬所参也、」（床につこうと思っていた所、自宅の庭の木の葉が落ち、木々を揺らす風の音を聞くにつけ、寝つけなくなつて俄かに参上した）と説明している。

このいかにも興ある公衡の行動に、「女房感悦」し、こうなつたら逝く秋を皆で興を凝らして過ごそうと、連歌、和歌が殷富門院の女房の「新中納言」や「尾張」も交えて催された。そうこうするうちに、「及鷄鳴数声」と夜明け近くなり、公衡は夜が明け切る前に退出する。定家は猶しばらく御所に残り、雨音を聞きながら一人「空階雨滴之句」を数度口ずさんだ後、笠を借りて退出する。

以上がこの日の記事の大まかな流れである。今この日の記事全体を内容で分けるとすると、大きく四つに分けられる。まず秋の逝く日を一人で過ごすのに堪えられなくなった定家が、女院の許に参り「大輔」と「清談」に及んだ後、退出しようとするまで。次に公衡の突然の参入と、その参入の理由を披露するまで。そして次には公衡の興ある行動に動かされる形で他の女房も加え種々の催しに及ぶまで。最後に公衡が雨の中退出し、定家自身は猶徘徊した後、「空階雨滴之句」を口ずさみ退出するまで、という具合になろう。

いずれの場面も九月晦の情趣に関連した話題となっており、記事全体が、秋の逝く日のいたたまれなさを和歌等に興じ共に慰めるといった、一種物語的な雰囲気のものとなっている。又、この

日集まったメンバーの中で、定家、公衡、殷富門院大輔の三人は、この年の四月に奏覧された『千載和歌集』に入集しており、このことに関連して久保田淳氏は当該記事を「彼等が沈湎していた感傷的な文学的雰囲気横溢する記事ともいえる」と評しておられる。

さて、この日の記事で私が特に注目したいのは、記事の最後で、「空階雨滴之句数返」と記している箇所である。この一節に関しては、久保田淳氏が既に指摘しておられるように、『和漢朗詠集』所収の唐の詩人張読の漢詩の一節が踏まえられている。

〔資料4〕『和漢朗詠集』卷上・落葉・三〇七

三秋にして宮漏正に長し 空階に雨滴る

万里にして郷園何くんか 在る 落葉窓深し

（本文は「新潮日本古典集成」の訓読文、以下同じ）

この漢詩に関して一つつけ加えておくなら、「三秋」という語は現代の大半の注釈書は秋三か月を指して「三秋」というと解説しているが、例えば鎌倉時代初期の古注釈である『和漢朗詠集永濟注』は、「三秋」に関して「或云、三秋トイハ、九月ナリ。第三秋也云々」と、晩秋を指して「三秋」と解釈し得る余地を認めている。また定家自身この漢詩を九月晦に口ずさんでいることから、中世には「三秋」を晩秋と捉える考え方もあったと考えられるし、さらに定家自身も「三秋」を晩秋と考えていた可能性があったと思われる。

さて、この詩の前半つまり（晩秋になって宮中の漏刻が示す夜の時も遅く、夜はなかなか明けないので、訪れる人もいない階の下で

独りしめやかに滴る雨の音を聞いている」といった箇所が、『明月記』の当該記事の状況と似通っており、定家も雨の音を聞きながら思わずこの詩を口ずさんだ、という状況が考えられよう。

だが、『和漢朗詠集』所収の漢詩の一節を口ずさむといった場面からも一つ想起されるのは、物語の主人公が物思いにふけるといった場面であろう。

〔資料5〕『源氏物語』・幻巻

にはかに立ち出づる村雲のけしき、いとあやにくにて、おどろおどろしく降り来る雨に添ひて、さと吹く風に燈籠も吹きまどはして、空暗きこちするに、「窓をうつ声」など、めづらしからぬ古言を、うち誦じたまへるも、をりからにや、妹が垣根におとなはせまほしき御声なり。

（本文は「新潮日本古典集成」以下同じ）

『源氏』の引用文は、紫の上の死後、哀傷の日々を送る源氏の姿が描かれている幻巻の一場面である。源氏は突然降り出した五月雨を前に「窓をうつ声」と漢詩の一節を口ずさむ。それをそばで聞いていた夕霧は「妹が垣根におとなはせまほしき御声なり」と、亡くなつた紫の上にも聞かせてあげたいようなお声だと思ふ。紫の上を亡くしてからすつかり物思いにふけることの多くなつた源氏の姿がここには描かれている。ここで源氏が口ずさんだのは「秋の夜長し夜長くして眠ることなければ天も明けず 秋々たる残んの燈の壁に背けたる影 蕭々たる暗き雨の窓を打つ声」（『和漢朗詠集』・巻上

・秋夜・二三三）という漢詩の一説である。

〔資料6〕『源氏物語』・蜻蛉巻

東の高欄におしかかりて、夕影になるままに、花のひもとく御前の草むらを見わたしたまふ。もののみあはれるなるに、「中について腸たゆるは秋の天」といふことを、いと忍びやかに誦じつつるたまへり。

次は「東の高欄」に寄りかかった薫が秋草の花の咲く庭先の草むらを見渡しつつ、「中について腸たゆるは秋の天」（『和漢朗詠集』・巻上・秋興・二三三）と口ずさむ、蜻蛉巻の一場面である。ここでは秋の夕暮れの何とも言えない侘しさに感じ入っている薫の姿が描かれている。このように折にふれ漢詩の一節を口ずさむという姿は、『源氏』以後の物語に多く見られる。その中で特に『明月記』の当該記事と類似した場面が見られるのが『狭衣物語』の次の場面であろう。

〔資料7〕『狭衣物語』・巻二

九月も晦日になりぬれば、「ただ今日明日ばかりこそは」と、いとど吹きそふ木枯しも身にしみまさりて、もの心細くながめ臥したまへるに（中略）

夕霧絶え間なきに、時雨だちて、折々うち暗がりたる空の気色ものむつかしければ、入らせたまひて、「御格子まるれ」などあれど、つくづくとながめたまひて、「宮漏正に長し、空階に雨滴る」と忍びやかに誦したまへる御声、常のことなれど、なほ

聞くことにめづらしくめでたければ、若き人々などは、奥へもえ入り果てず、賞で入りて群れるつつ、「このごろこそいみじうものおぼしたる気色なれ。何事ならむ」なども言ひあはすべし。

(本文は「新潮日本古典集成」、以下同じ)

この場面は、恋しい源氏の宮の入内が近くなつた九月の晦に主人公狭衣が悲嘆を胸に秘めつつ宮の許に参つた場面である。「夕霧絶え間なきに」以下の所で、狭衣は「時雨を」つくづくとながめ、「宮漏正に長し、空階に雨滴る」と口ずさむ。ここで狭衣がこの詩を口ずさんだのも、「九月晦日」に源氏の宮のもとで「時雨たち」た外を眺めるといつた状況に引かれたためと思われる。引用文の最後で狭衣の様子を見た女房たちが、「このごろこそいみじうものおぼしたる気色なれ」と、狭衣が最近物思いにふけりがちなのを不審に思っていることから、この場面で狭衣が「宮漏正に長し」の詩を吟ぐといつた行動は、狭衣の恋による物思いの様を象徴していると思われる。

ここで再び『明月記』文治四年九月の記事について考えてみたい。この日の記事の最初から見ると、九月の晦の興に引かれた人々が集まり、逝く秋を惜しみつつ和歌、連歌等に興じている。又集まつた人々の中には勅撰歌人も数人おり、「文学的雰囲気も一層高まつたことと思われる。そういったまるで物語の一場面かのようにあつた女院での一夜の記事の締めくくりに、定家は自分が「空階雨滴之句」を口ずさんだと日記に記しているのである。

おそらく定家は実際に「空階雨滴之句」を口ずさんでいたのである。だがそれは単に漢詩の知識を吐露したというわけではなく、自身を物語の主人公になぞらえた一種のポーズとして意識した上での行動であつたと思われる。そのことは、先に見た『明月記』の記事と「狭衣」の場面を見比べても分かるし、後述するように、文治年間の定家の種々の文芸創作において「狭衣」の影響がある程度現れていることから予想されるのである。

日記に「連歌、和歌等」種々、狂言とあるように、座は大いに盛り上がった。そして「鶉鳴数声」の後、「雨漸滂沱」の中、定家は大騒ぎの後の静けさの中に身を置く自分の姿を「狭衣」の「時雨を」つくづくとながめる主人公の物思いにふける姿と重ねるように、「空階雨滴之句」を朗々と「数返」に渡つて詠つたのである。おそらく定家は他人が自分の発言を聞くことも大いに期待していたであろう。そして後にこの日のことを日記に記す際にも、明け方に自分がとつた行動がいかにも興ある様として思い出されたので、日記にもそのまま記したのであろう。

四 定家詠にみられる「狭衣物語」の影響

ここでひとまず『明月記』本文から離れて、文治年間頃の定家が「狭衣」から受けた影響に関して、和歌及び定家が少将在任中に執筆したといわれている『松浦宮物語』¹⁾について見てみる。

〔資料8〕『無名草子』

「『狭衣』こそ『源氏』に次ぎてはようおほえ侍れ。『少年の春は』とうちはじめたるより、言葉遣ひ何となく艶に、いみじく上衆めかしくなどあれど、さしてそのふしと取り立てて心にしむばかりの所などは、いと見えず。

(本文は「新潮日本古典集成」、以下同じ)

『無名草子』では「『狭衣』こそ『源氏』に次ぎてはようおほえ侍れ」と、『狭衣』が『源氏』について高い評価を受けている。又、その評価が、傍線部にあるように『白氏文集』を典拠とした冒頭部を始め、その文章表現の巧みに向けられていたことが伺われる。

〔資料9〕『拾遺愚草』・上・皇后宮大輔百首・二七八

寄名所恋十首

いかで猶わがてにかけてむすび見んたゞあすか井の影ばかりだ
に (本文は『訳注藤原定家全歌集』、以下同じ)

この歌は、文治三年、定家二十六歳の時に詠んだ歌である。「寄名所恋」とあるように、「あすか井」という所に寄せて恋の歌を詠んでいるが、「あすか井」に恋の情趣を寄せるといったことは『狭衣』の飛鳥井姫君の影響があると考えられる。

〔資料10〕『狭衣物語』・巻一

とまれともえこそ言はれぬ飛鳥井に
宿りはつべきかけしなれば

と言ふさまぞ、なほその水影見ではえやむまじうおほされける。

飛鳥井に影見まほしき宿りして

みまくさがくれ人やとがめむ

これは狭衣が飛鳥井姫君と出会って間もなく歌を贈答する場面である。姫君は狭衣が自分の許に泊まろうとするのに対して、自分の家には狭衣を迎えるだけのしつらえがないと言って断ろうとする。

それに対して狭衣は「なほその水影見ではえやむまじうおほされける」と、ますます姫君の姿を見たくなり、姫君と一夜を共にしたいとの気持ちを歌に詠んでいる。

久保田淳氏が「藤原定家全歌集」付載の「歌枕一覽」の解説で飛鳥井に関して「『八雲御抄』に狭衣というように『狭衣物語』以後歌枕とな』つたと指摘されていることから、定家の「あすか井」の歌も『狭衣』の影響を受けたと考えられる。同様の影響は次の定家詠にも言える。

〔資料11〕『拾遺愚草』・上・奉和無動寺法印早率露臍百首・四九一

雑

おもふ人あらばいそがむふなでして蟲明の瀬戸は浪あらくとも
この歌は文治五年、定家二十八歳の時に詠まれた歌である。(愛する人がいるならば、船出して海路を急ごう。たとえ虫明の瀬戸は浪が荒くても)という歌意であるが、虫明の瀬戸に恋の情趣を詠み込むということも『狭衣』の影響があると思われる。

〔資料12〕『狭衣物語』・巻一

寄せ返る波ばかり見えて、舟のはるかに消え行くが、心細き声

して、「虫明の瀬戸へ今宵」と歌ふも、いとあはれに聞こゆ。

流れても逢ふ瀬ありやと身を投げて

虫明の瀬戸に待ちこころみむ

これは、狭衣の乳母子の式部大夫に筑紫へ連れ去られた飛鳥井の姫君が、道中の虫明の瀬戸で身をはかなみ入水する場面である。大夫から身を守り狭衣への想いを貫こうとする姫君の激しい恋心が歌には詠み込まれている。

虫明の瀬戸は例えば平忠盛が「むしあけのせとのあけぼの見る時は宮このことぞわすられにける」(『忠盛集』・一五七)と詠んだように、元々景勝地として知られていた。それが良経、定家あたりから虫明の瀬戸に恋の情趣を重ねる歌が詠まれるようになったようである。[↑]

〔資料13〕『拾遺愚草』・上・重奉和早率百首・五〇九

春

わらび折るおなじ山ぢのゆきすりに春のみやすむいはのもと哉
この他、右の歌では定家は行きずりに草木を折るといふ状況を詠み込んでいるが、久保田淳氏は前掲著書の当該歌補注でこういった発想の参考歌として『狭衣』の二首を挙げておられる。

以上見てきたように、文治年間の定家の和歌の中には少なからず『狭衣』の影響が確認できたが、次に『松浦宮物語』についても見ておく。

五 『松浦宮物語』に見られる『狭衣物語』の影響

〔資料14〕『松浦宮物語』・巻一

あしひきの山のやまどりやまずのみ

しげきわがこひましてくるしも

ありしばかりだに、いかでおもふ事をはるけてしがなと思ひわたるに、このみこは内にまゐりたまふべきになりぬ。

(本文は『松浦宮全注釈』、以下同じ)

これは、男主人公氏忠が心中密かに恋心を抱いていた后腹の姫君神無備の皇女が主人公と密かに契りを結んで間もなく、入内することになった場面である。『松浦宮物語』のこういった筋立てに関して、『松浦宮全注釈』(平9 若草書房)で萩谷朴氏が、

皇女入内というところで、局面の第一段の転換がある。このような筋をとるものの先例としては、(中略)『狭衣物語』巻一之上に、狭衣が恋を打ち明けた直後、源氏宮春宮に参ることとなり、狭衣懊悩する例、といったような先行作品があるが、殊に、『狭衣物語』の筋が、この作品と最も一致している。と解説されている。

〔資料15〕『松浦宮物語』・巻一

みだるる心あるなどは、さばかりいひしかど、うち見るよりものおぼえず、そこらみつる舞いひめの花のかほも、ただつちのこくとくになりぬ。

また、これは、唐に渡った男主人公が唐の帝の妹華陽公主に初めて逢った時、公主の美しさを表現した箇所、他の女性たちも公主の前では、泥人形のように魅力のないものだとして評している一文が、

〔資料16〕 『狭衣物語』・巻一

からうじて見えたるにやあらむ、「まことにめでたかりけり。

あなものをぐるはしや。日ごろ見つる殿上人などは、ただ土なり

けり」とささめきあへる、いとをかしうおぼえて、(後略)

と、『狭衣』と同様の表現となっている。

以上、文治年間の定家詠、及び定家が創作したとされる物語から、『狭衣』との影響関係を見てきた。定家がこの頃既に種々の文芸創作にあたって、しばしば『狭衣』を念頭におくことがあったことが分かるであろう。

まとめ

本稿では『明月記』の治承・文治年間の記事を中心に考察を進めた。その中で用例数は僅かであるが、定家が事実を如何に記すかといったことかなりの配慮をしていたことが明らかになった。その配慮の具体的な現れとして、一つには一日の記事を記す際の構成意識、そして一つにはレトリックの駆使、そしてもう一つは物語の一場面を現実の状況と重ね合わせようとする意識といったものが挙げられる。

この時期定家は、治承二年三月別雷社歌合の三首出詠に始まり、

初学百首、堀河院題百首を試みている。以後も文治二年には、寂蓮、隆信、家隆等と二見浦百首を試み、その歌才が西行に認められてか、まもなく宮河歌合の加判をも求められている。文治年間には他にも皇后宮大輔百首、閑居百首等に出詠し、文治四年奏覧の『千載和歌集』には八首採ばれている。この他にも定家が少将在任中に物語を創作したであろうことは先述した通りである。

このように治承年間から文治年間にかけては、定家が種々の文芸活動を盛んに行っていた時期である。先の『明月記』の記事の最後の部分で『狭衣』をある程度念頭においた上で自身を九月晦の中に物語的な青年として記し留めようとしたのではないかと私が考えるのも治承、文治年間の定家の盛んな文芸活動と無縁ではない。

この頃の定家の歌風は六条家からは「新儀非抛達磨歌」と誹謗されるが、それだけ定家が新風を吹き込んだことも確かである。そしてそのような文芸活動に対して旺盛な意欲を見せていた定家であったからこそ、この頃の日記の中にも他の公家日記とは一線を画した極めて文学作品に近い種々の記事が記されたのではないだろうか。それは、時には明確な構成意識をもって、そして時には物語的世界への憧憬をそのまま日記本文にまで表出させるといった形でなされていたと私には思われるのである。

〔注〕

(一) 『藤原定家の研究』(昭32 文雅堂書店)。

(2) 「明月、片雲無し 『明月記』史料として、文学として」

(『国文学』第二六卷第六号 昭57・5)。

(3) 『藤原定家明月記の研究』(昭52 吉川弘文館)。

(4) 「『明月記』を写し利用した者は誰か」(『国文学』第三八卷第二号 平5・2)。

(5) 堀田善衛氏『定家明月記私抄』(昭61 新潮社)。

(6) 「研究資料日本古典文学」⑨日記・紀行文学(昭59 明治書院)。

(7) 注(6)に同じ。

(8) 「永濟注」の成立年次については『和漢朗詠集古注釈集成』

第三卷(平元 大学堂書店)の当該注解題に拠った。

(9) 以下、『明月記』の当該記事が『狭衣物語』の一場面を引用しているという指摘は、管見では他に見出せなかったが、稿者は物語方面の研究に疎いので、諸家のご教示を賜りたい。

(10) 『松浦宮物語』の成立に関しては諸説あるが、稿者は、『無名草子』に「また、定家の少将の作りたる^{とて}あまた侍るめるは、(中略)『松浦の宮』とかやこそ、ひとへに『万葉集』の風情にて、『宇津保』など見る心地して、愚かなる心も及ばぬさまに侍るめれ」とあることを重視して、作者を定家とし、成立時期を定家の少将在任中の文治五年八一八九V十一月から建仁二年八一〇二V閏十月の間としておく。

(11) 後藤祥子氏「女装する定家」(『季刊・文学』第六卷第四号

平7・10)。

(12) この他、『明月記』貞永二年八一三三V三月二十日条で、定家は『狭衣』を『源氏』と共に「於歌者抜群」と評している。

※なお、原文の引用にあたっては、漢字は原則として現行の字体に直した。また、引用文中の傍線は私に付した。

——ふじかわ・よしかず、広島大学大学院博士課程後期在学——